

サポート次はアフリカ



松戸さん
角田の被災地支援が縁

普と名付けた交流会を開いており、この時が二回目だった。井上さんによるサッカ

ー教室は喜ばれ、続くサッカー大会も村民総出で盛り上がった。

角田さんは震災後、被災地に靴を届けるなど支援を続けた。だが被災者と話すう

て、物を渡すだけではなく、互いに楽しむことで活動を長時間。十二世紀ごろ、岩を彫つて築かれた世界遺産の岩窟教会があるラリベラ村だ。被

災地支援を通じて知り合った、Jリーグのベガルタ仙台のコーチ、井上和徳さん(四)

に誘われた。

チームは震災前の二〇一一

年一月に現地でベガルタカツ

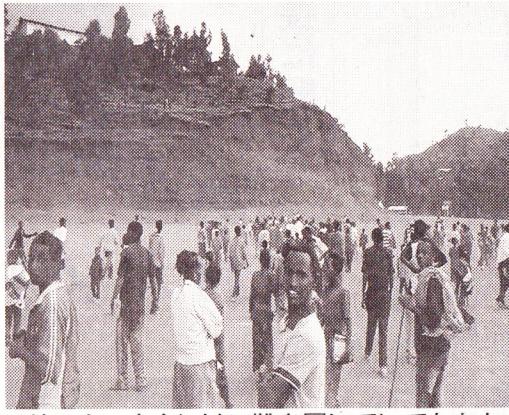


新妻さんが1994年にラリベラで出会ったフー

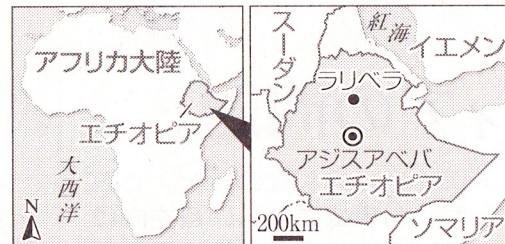
太郎・新妻さん提供



1月、アフリカの大地に苗木を植える角田さん(左)=いずれもエチオピアのラリベラで、角田さん提供の動画から



サッカー大会には、靴を履いていても左右で違ったり、すり切れた服を着る子もいた



く続けられると考えるようになつた。一年末ごろからは、震災報告会を開いて集めた寄付金で、被災地の子どもをベガルタの試合に連れていくなど「子どもを笑顔にすること」に重点をおいている。

ラリベラの土ぼこり舞う砂地で素足だつたり履く靴が左右違つ村民の生活を見れば、靴あげたくなる。でも「被災地もそうだけど、長く寄り添うことがもっと大事」とあらためて思った。



ベガルタカップの閉幕後、角田さんは、新妻さんとともに山のふもとに向かい、現地の人と苗木を植えた。「すぐには実を結ばない活動を異国で続ける新妻さんやベガルタの取り組みって、すごい。だから何か手伝いたいし、ボクも東北支援を途中で投げ出すわけにいかない」。角田さ

んは再びアフリカ訪問の機会を願い、東北にも長く寄り添つたきっかけは、一九九四年に

東日本大震災の被災地支援を機に、千葉県松戸市で靴の小売店を営む角田寛和さん(五〇)は多くの人と出会い、アフリカ支援にも関心を持つようになった。共通するのは、継続の大切さだという。

(上條憲也)

年、一人の女性とフクロウの幼鳥の出合いにさかのぼる。幼鳥の出合いにさかのぼる。當時、旅行雑誌編集者を辞めてアフリカ旅行中だった新妻香織さん(五三)は、福島県相馬市では、ラリベラで少年らが幼鳥をボール代わりに投げて遊んでいた場面に遭遇する。見かねた新妻さんは少年らから幼鳥を譲り受け、森に返そうとした。だが見渡す限り森林伐採による荒野。フー太郎と名付けて三週間ほど一緒に旅をして、最後は教会で放した。

帰国後、何かできることはないと模索し、四年後、NGO「フー太郎の森基金」を設立。フー太郎との旅の話を講演会でするなどして資金を集め、ラリベラを中心に植林を始めた。地元の人にも「木を切つて売ればすぐ利益は得られるけれど、木を植え森を育てれば鳥や虫が訪れ、豊かな土地ができる」と緑化の意義を説いた。

ベガルタの関係者が同じ東北人の新妻さんの活動に賛同して生まれたのがベガルタカップだった。



そもそもベガルタ仙台が、ラリベラにかかるることになつたきっかけは、一九九四年に